

おわりに

ぼくが自分に「トレジャーハンター」の称号を与えたのは、十五年ほど前のことである。それ以前から、テレビに出たりすればそう呼ばれてはいたが、自ら名乗るのはけっこう勇氣のいることだった。長く続けているだけで何の実績もないからだ。

決断したのは、それまでの三十数年の間に、ほかに誰ひとり成果を上げる者が現れなかったこと。それに、メディアの側に立てば、そう名乗ってもらうことで格好がつくことがわかっていたからだ。

ただ、事情を知らずにそれが職業だとかんちがいする人もいる。そこで、日本では絶対に職業としては成り立たないものだということを説明しなければならぬ。すると今度は、

「ロマンのあるいい趣味ですね」

ということになる。これが必ずしも的を射た評価ではないので、それをネタにもものを書いたり、テレビ番組の企画に協力したり出演したりして、なにがしかの報酬をいただいていることを伝えると、

「趣味が仕事になっていいですね」

とうらやましがられる。半分以上は当たっているので、

「おかげさまで」

と話をまとめるわけだが、そういうときいつも、もどかしさを感じてしまう。その理由が自分でもよくわからなかったが、七十数年の人生を振り返って、最近ようやく思い当たったことがある。育った環境と幼児のころの生活習慣、そこで培われた精神構造は、一生身についてはがそうにもはがれないもののようなのだ。

ぼくは子どものころ、遊びと勉強の区別がつかなかった。育ったのは熊本市の郊外。近くに幼稚園や保育園がなかったなので、就学前は独学で過ごした。つまり、近所中を遊び回った。二歳下の弟といっしょのときもあれば、

ひとりのときもあった。よその畑や田んぼ、竹やぶ、井手、神社、墓地、空襲で焼けた工場跡などを駆け回って、そこで出会うさまざまな動植物を見つめ、その土地が存在する意味、あるいは人間との関わりを、五感を使って心にしみこませた。

小学校に上がって教科書を手にすると、そこに載っているのは知っていることばかり。何のことはない、学校の教科書で学ぶより、遊び回ったほうが知識は手っ取り早く身につくものだったのだ。

その延長線上に進学や就職があり、ぼくは本づくりの仕事で「遊び」としてきた。トレジャーハンティングは

そこからスピノフしたものである。

そして、いい加減ジジイになるまで生きてきて、人生の六十四パーセントを占める四十八年間を、宝探しに明け暮れてきたわけだが、ただまじめに遊び続けてきただけのこと。

考えてみれば、人間が地球上で特別な存在になったのは、何かのきっかけで遊びを知り、それを高めてきたからにほかならない。だから、ぼくは「遊び」と「学習」、あるいは「遊び」と「仕事」を区別する考え方にはなじめない。

*

最後に、もうひとつ付け加えておきたいことがある。

二〇二二年は、エジプトの王家の谷でツタンカーメンの王墓が発見されてからちょうど百年め。世紀の大発見を成し遂げたアメリカ人ハワード・カーターの名前を、本書に二度登場させてもらった。それほど彼は、ぼくにとって憧れであり、尊敬する人物なのである。その理由は、素人であるにもかかわらず、考古学者顔負けの緻密さと執念で、歴史の謎の扉をこじ開けた偉大な実績もさることながら、彼の純粹な心に胸を打たれたからだ。

手記の中でカーターは、黄金のマスクをかぶせられた若き王のミイラが収まる最後の棺を開き、胸の上に置か

れた干からびたヤグルマギクの花束を見つけたときのことを書いている。

「いたるところ黄金の色きらめく、帝王の豪華、王者の華麗のなかにあつて、まだほのかに色をとどめたささやかなあせた花ほど、美しいものはなかった。それは、三千三百年といつてもごくわずかの時間であつて、昨日と今日の境にすぎないことを物語っていた。まことにこの一脈の自然は、古代とわたしたちの現代文明をちかしいものにした」（ハワード・カーター『ツタンカーメン発掘記』酒井傳六／熊田亨・訳より）

ぼくが求めているのも、こんな出会いなのかもしれな

い。王墓への入り口を見つけたとき、カーターはその中に収められているきらびやかな黄金の副葬品については、ある程度は想像できていただろう。ところが、ヤグルマギクの花束は、まったく想定外のものだった。しかし次の瞬間には、それが若き王妃アンケセナーメンが置いたものであることに気づいたのだ。すると、あつという間に三千三百年の時間が縮まり、悲しむ王妃の顔までもが浮かんできたにちがいない。

ぼくも、大判や小判を発見したときのことはおおよそ想像できる。欣喜雀躍きんきしゃくやくするのは目に見えているが、そこに黄金以外の何かがあるような気がするのだ。それは形

のないものかもしれない。隠された財宝には必ず役目があり、隠した人の思いが込められている。そのメッセーヂを受け止めることができたなら、なんとすばらしいことだろう。数百年の時を隔てて、過去の人とのコミュニケーションが成立するなら、これ以上のロマンはない。

二〇二二年十月 八重野充弘

